

「東京新聞」の「平和の俳句」に6月に掲載された句から、紹介し、感想を書きたい。書評家・作家の中江有里氏を新しく選者に加えた。中江氏はテレビで「戦争法案という層にはいくら説明してもしょうがない」と発言したそうで、安倍政権の見解を支持している。その中江氏を選者にしたことに「東京新聞よ、お前もか!」という批判が起きている。

「村度（そんたく）も自肅もしない私です 吉田澄江（83歳）」<金子兜太 すぐ妥協したり諦めたりするのは嫌。戦争好きな政権は大嫌い。> <いとうせいこう 世の中、それが多すぎて逆にストレス社会でギスギスする。御身大切。> 「村度」「自肅」という言葉がはやっている。権力に言葉を奪われると、民主主義が死んでしまう。自分の言葉を持つ闘いが平和を生み出していく。ジャーナリズムに関わる人々の奮起に期待したい。

「桜花（さくらばな）散ることだけが褒められた 狩野（かのう）美智子（86歳）」<金子兜太 戦死だけが妙に称賛されるのが戦争。桜花は満開こそ見事のはず。> <中江有里 桜の花びらは散ると消えてしまう。でも人を消すことはできない。> 戦争中は桜の花びらのように散って、死ぬことが称賛された。死に方は自分自身でも決められないが、散り方の良し悪しを国に決めてもらいたくない。国家主義の横暴と恐怖を再現させてはならない。

「戦ひし皆失ひて竹の子掘る 阪倉弘一（89歳）」<金子兜太>戦争で残るものなんかない。今次大戦でも然（しか）り。竹藪（たけやぶ）が残っただけ。> <いとうせいこう>戦地でも塹壕（ざんごう）を掘ったかもしれぬ。竹林の奥で消えない記憶を掘る。> 戦争は全てのを奪ってしまう。阪倉氏は愛する家族も財産も失ったのではないか。生命力溢れる竹の子を掘りながら、戦争の過去と平和の現在に思いを馳せているのであろう。

「歯がみして私の前歯四枚（よんまい）落つ 鈴木明子（81歳）」<いとうせいこう>ニュースを見て思わずギリギリ歯がみし、結果歯科医院で三時間以上治療をして、街頭でアクションできるようにしてもらったという。> 悔しくて怒り、歯がみしたら歯が落ちた。それでも、治療して街頭で抗議行動に参加したという。真に生きている人だと思う。今、国民は鈴木氏のような怒りを表す時ではないか。安倍政治に飲み込まれたら、取り返しがつかなくなる。上記の4句は皆、80歳を超えた方々の句である。魂を澄まし、平和を求め、パワフルに生きておられる姿に敬服する。私も倣って、自分の言葉を持ち、行動で表し続ける者でありたいと励まされた。

「平和の俳句 戦後71年」から。「寒風に人恋ひ来たる母子豚 篠田 壽（73歳）」篠田氏は福島原発事故後、放射能の生物への影響を調査している。立ち入り禁止区域になった所では、家畜が野山に放たれた。寒い朝、5年間生き延びた豚の母子が人恋しいのだろうか、近くまで寄って来たという。篠田氏は「原発事故の罪深さを思った」と書いている。「餓死をせし牛たちの骨震災碑 津田正義（76歳）」牛たちは生き延びることができずに餓死した。畜舎や野山で白骨化した家畜が多くあると聞く。政府、東電は、賠償経費節減のため、除染したから大丈夫と言って、住民を帰郷させようとしている。人間への健康被害については分からないことが多い。だが、危険地帯には帰るべきではないと思う。

「昼食とる学生らの上ヘリの腹 佐々木憲幸（60歳）」佐々木氏は小学校の教諭を定年退職して、沖縄の大学で聴講している。中庭で昼食をとっていた時、米軍の大型ヘリコプターが爆音とともに、石を投げたら届きそうな低空飛行で現れた。思わず首をすくめたが、地元の学生たちは誰一人、空を見上げることなく、弁当を食べ続けた。佐々木氏は「沖縄の現実を実感させられた出来事だった」と書いている。